此の老君士を衷心より歓迎する
―昭和2年4月福井市役所発行「グリフィス博士」について―

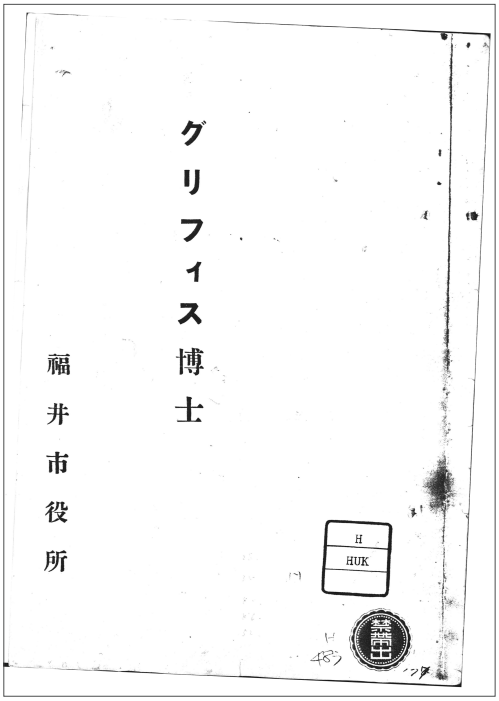
山下　英一

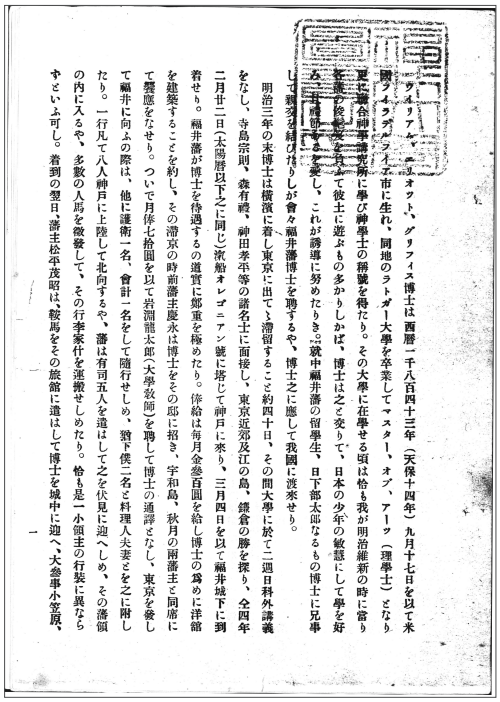
『グリフィスと福井』の増補の仕事をしていて、昭和2年、グリフィスが56年ぶりに福井を訪ねるところで手にした資料に「グリフィス博士」という訪問記念に福井市役所が発行した薄いポケット版の小冊子があった。それを読んで目から鱗の落ちる思いがした。書くのにことばを選び、短い文章にその生涯のほとんどが、というのは1年後に85歳で亡くなるので、福井を中心に雄々しく細やかに綴ってあった。その筆者はよほどグリフィスを知っている、いや尊敬する日本人に違いないと思った。そこでこの「グリフィス博士」という小伝が取り上げた人物のパーソナリティー（personality）の端々について考えてみて、おそらく博士の生涯をまとめて唯一にして最初の文章を記した筆者は誰であろうか探しあてたい。それにはその人物が福井にいかに深い恩情をいだいていたかをいくつかの角度から知ることによって得られよう。なお題字は「グリフィス博士」の終りの文から引用した。

―“The Mikado's Empire”『皇国』―平和の勝利は戦争の勝利の名声に勝る―ＭＥ

（一）『皇国』（ＭＥ）を読んで旺盛な好奇心と同時に文学表現に近い文体はグリフィスが筆力のある文筆家であることを知る。勿論グリフィスが福井の一人暮らしで接する自然や宗教であるから表現にもある種の限界があろう。できるだけ客観的にとらえたい。同時代の歴史家ジョージ・バンクロフト（１８００～１８９１）の進歩の思想を信じたアメリカ国家主義と同質なものがあり、また歴史叙述の文学的なのも当時の特色であった。

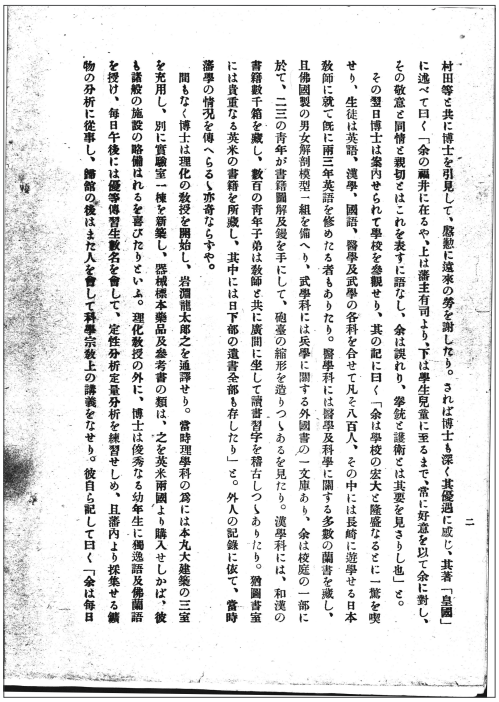
頭でなく心でとらえた日本理解ということでその臨場感がアメリカ人の間に人気をよんだ。三十歳過ぎの文章は若く荒削りな所がある。それが却って臆面なく思うことを述べて怯まない。１８７６年はアメリカ独立百年にあたり、グリフィスの故郷フィラデルフィアで万国博覧会が開催された。『皇国』はグ





ウィリアム・エリオット、グリフィス博士は西暦一千八百四十三年（天保十四年）九月十七日を以て米國フィラデルフィア市に生れ、同地のラトガー大學を卒業してマスター、オブ、アーツ（理學士）となり、更に當合神學講究所に學び神學士の稱號を得たり。その大學に在學せる頃は恰も我が明治維新の時に當り、各藩の俊秀なるものゝ多くは、彼の地に遊ぶもの多かりしかば、博士は之と交りて、日本の少年の敏慧に比して學を好み、且つ進歩すること甚だしきを愛し、これが誘導に努めたりき。就中福井藩の留學生、日下部太郎なるもの博士に兄事して親交を結びたりしが會々福井藩博士を聘するや、博士之に應じて我國に渡來せり。

明治三年の末博士は横濱に着し東京に出て、滯留すること約四十日、その間大學に於て二週日科外講義をなし、寺島宗則、森有禮、神田孝平等の諸名士に面接し、東京近郊及江の島、鎌倉の勝を探り、全四年二月廿二日（太陽暦以下之に同じ）汽船オゴニアン號に搭じて神戸に來り、三月四日を以て福井城下に到着せり。福井藩が博士を待遇するの道實に鄭重を極めたり。俸給は毎月金參百圓を給し博士の爲めに洋館を建築することを約し、その滯京の時前藩主慶永は博士をその邸に招き、宇和島、秋月の兩藩主と同席にて饗應をなせり。ついで月俸七拾圓を以て岩淵龍太郎（大學教師）を聘して博士の通譯となし、東京を發して福井に向ふの際は、他に護衛一名、會計一名をして隨行せしめ、猶下僕二名と料理人夫妻とを之に附したり。一行凡て八人神戸に上陸して北向するや、藩は有司五人を遣はして之を伏見に迎へしめ、その藩領の内に入るや、多數の人馬を徴發して、その行李家什を運搬せしめたり。恰も是一小領主の行装に異ならずといふ可し。着到の翌日、藩主松平茂昭は、鞍馬をその旅館に遣はして博士を城中に迎へ、大參事小笠原、



村田等と共に博士を引見して、勝慰に遠來の勞を謝したり。されば博士も深く其優遇に感じ、其著「皇國」に述べて曰く「余の福井に在るや、上は藩主有司より、下は學生兒童に至るまで、常に好意を以て余に對し、その敬意と同情と親切とはこれを表すに語なし、余は誤れり、學銃と謹衛とは其要を見さりし也」と。

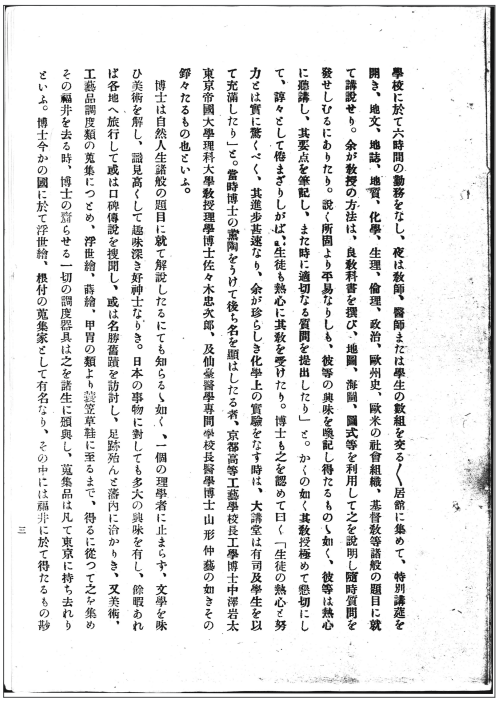
その翌日博士は案内せられて學校を參觀せり、其の記に曰く「余は學校の宏大と隆盛なるとに一驚を喫せり、生徒は英語、漢學、國語、醫學及武學の各科を合せて凡そ八百人、その中には長崎に遊學せる日本教師に就て既に兩三年英語を修めたる者もありたり。醫學科には醫學及科學に關する多數の蘭書を藏し、且佛國製の男女解剖模型一組を備へり、武學科には兵學に關する外國書の一文庫あり、余は校庭の一部に於て、二三の青年が書籍圖解及幾を手にして、砲臺の縮形を造りつゝあるを見たり。漢學科には、和漢の書籍數千箱を藏し、數百の青年子弟は教師と共に廣間に坐して讀書習字を精古しつゝありたり。猶圖書室には貴重なる英米の書籍を所藏し、其中には日下部の遺書全部も存したり」と。外人の記錄に依て、當時藩學の情況を傳へらるゝ亦奇ならずや。

間もなく博士は理化の教授を開始し、岩淵龍太郎之を通譯せり。當時理學科の爲には本丸大建築の三室を充用し、別に實驗室一棟を新築し、器械標本樂品及參考書の類は、之を英米兩國より購入せしかば、彼も諸般の施設の略備はれるを喜びたりといふ。理化教授の外に、博士は俊秀なる幼年生に獨逸語及佛蘭語を授け、毎日午後には優等傳生數名を會し、定性分析定量分析を練習せしめ、且藩内より採集せる鑛物の分析に從事し、歸館の後はまた人を會して科學宗教上の講義をなせり。彼自ら記して曰く「余は毎日

リフィスが転換期的年代（the epochal years）と呼び、1872，3，4年と続いた日本で最も重大な時代の貴重な産物となった。

グリフィスは福井藩校教師から福井再訪までの56年間に三つの日本志向があった。すなわち最初は「認識」（The Mikado's Empire1876），次が「発展」（The Japanese Nation in Evolution1907），三つ目は「和解」（Millard Fillmore1915）の志向順になろう。一般に、教師――牧師――文筆家がこの人の一生のように思われている。しかしグリフィスにとってもっとも遣り甲斐のあるのはその素質を生かしてやれる文筆のみであっただろう。また書く生活を中心に見ると、集中的に教科書、伝記、物語の順に三つの範疇に分かれている。

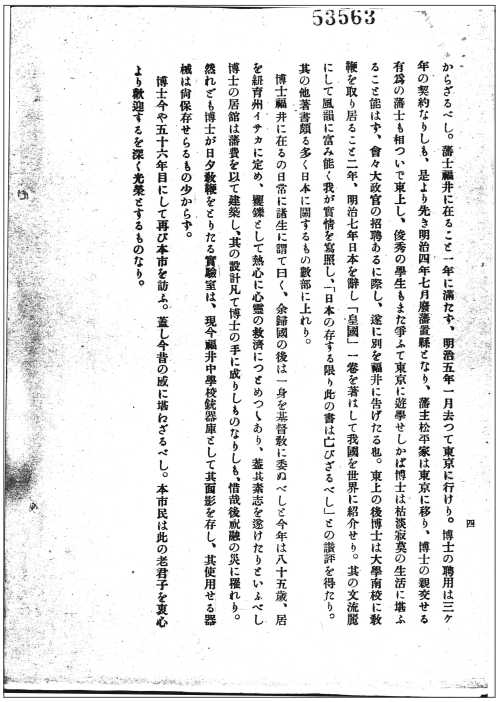
著書が多いグリフィスの場合、処女作 The Mikado's Empire をはじめとして Japanese Fairy World，三番目は The Religions of Japan（1895）のように日本から影響を受けた。彼はあくまで日本の良き理解者たらんと①現実を見据えた旅人として、②国民に愛される豊な伝統的文学の研究者として、③何が違うといっても宗教ほどあい異なるものはないが、その文化的な土台を認識できる者として、ここを出発点にグリフィスの日本贔屓はついに二十世紀に入る。1907年出版の The Japanese Nation in Evolution ではそれまでを振りかえって清にもロシアにも勝って強国に進化したと思われる日本を讃える書になり、信仰にもとづく愛国心や勇敢な行動のよって来たる国民精神のしからしめるところとなっていったであろう。ところがこの流れについてきた The Mikado—Institution and Person（1915）においてすでに日本の最大の危険は軍隊が日本の榮光を口実に神聖の象徴のごとくに剣を高く振りかざすときがくるかも知れないと書く。す



學校に於て六時間の勤務をなし、夜は教師、醫師または學生の數組を來る〳〵居館に集めて、特別講座を開き、地文、地誌、地質、化學、生理、倫理、政治、歐州史、歐米の社會組織、基督教等諸般の題目に就て講說せり。余が教授の方法は、良教科書を撰び、地圖、圖式等を利用して之を說明し隨時質問を發せしむるにありたり。說く所固より平易なりしも、彼等の興味を喚記し得たるもの〳〵如く、彼等は熱心に聽講し、其要点を筆記し、また時に適切なる質問を提出したり」と。かくの如く其教授極めて懇切にして、誇々として倦まざりしがごとく、生徒も熱心に其教を受けたり。博士も之を認めて曰く「生徒の熱心と努力とは實に驚くべく、其進歩甚速なり、余が珍らしき化學上の實驗をなす時は、大講堂は有司及學生を以て充滿したり」と。當時博士の靈陶をうけて後に名を顯はしたる者、京都高等工藝學校長工學博士中澤岩太、東京帝國大學理科大學教授理學博士佐々木忠次郎、及仙臺醫學專門學校長醫學博士山形仲藝の如きその錚々たるもの也といふ。

博士は自然人生諸般の題目に就て解說したるにても知らるゝ如く、一個の理學者に止まらず、文學を味ひ美術を解し、識見高くして趣味深き好紳士なりき。日本の事物に對しても多大の興味を有し、餘暇あれば各地へ旅行して或は口碑傳說を視聞し、或は名勝舊蹟を訪討し、足跡殆んど藩内に洽かりき、又美術、工藝品調度類の蒐集につとめ、浮世繪、蒔繪、甲冑の類より讀笠草鞋に至るまで、得る〻に從つて之を集めその福井を去る時、博士の齋らせる一切の調度器具は之を諸生に頒與し、蒐集品は凡て東京に持ち去りといふ。博士今かの國に於て浮世繪、根付の蒐集家として有名なり、その中には福井に於て得たるもの尠

三



53563

からざるべし。藩士福井に在ること一年に滿たず、明治五年一月去つて東京に行けり。博士の聘用は三ケ年の契約なりしも、是より先き明治四年七月廢藩置縣となり、藩主松平家は東京に移り、博士の親交せる有爲の藩士も相ついで東上し、俊秀の學生もまた爭ふて東京に遊學せしかば博士は枯淡寂寞の生活に堪ふること能はず、會々大政官の招聘あるに際し、遂に別を福井に告げたる也。東上の後博士は大學南校に教鞭を取り居ること二年、明治七年日本を辭し「皇國」一卷を著はして我國を世界に紹介せり。其の文流麗にして風韻に富み能く我が實情を寫照し、「日本の存する限り此の書は亡びざるべし」との讃評を得たり。

其の他著書類多く日本に關するもの數部に上れり。

博士福井に在るの日常に諸生に謂て曰く、余歸國の後は一身を耶蘇教に委ねべしと今年は八十五歳、居を紐育州イサカに定め、瓔珞として熱心に心靈の救濟につとめつゝあり、蓋其素志を遂げたりといふべし博士の居館は藩費を以て建築し、其の設計凡て博士の手に成りしものなりしも、惜哉後亡融の災に罹れり。然れども博士が日々教鞭をとりたる實驗室は、現今福井中學校徒弟職として其面影を存し、其使用せる器械は尙保存せらるゝもの少からず。

博士今や五十六年目にして再び本市を訪ふ。蓋し今昔の感に堪ふるべし。本市民は此の老君子を衷心より歓迎するを深く光榮とするものなり。

四

なわちミカドがカミに祭り上げられたあとで支配者として蔑まれたとき求められたのは、ミカドの人格復権と信教の自由であった。憲法の約束どおり信教の自由は最大限に実現してほしい。そして主権の根拠を憲法が犯す危険が常に政治にあるとも書く。

（二）日本から帰国したグリフィスは20年の間に主な単行本を3冊出版した。１８７６年の The Mikado's Empire、１８８０年の Japanese Fairy World、１８９５年の The Religions of Japan であり、最初は歴史、次は文学、三番目は宗教というように三つの文化に区分される。いずれも気難しくペダンチックな論文形式に陥ることなく、物語的開放感に富む文章から成る作品である。

上記の著書はグリフィスの多数ある著書のなかで著者が最も関心のあるテーマで占められているのが特色である。すなわち The Mikado's Empire は日本の古代から執筆者が日本で体験した明治初年に至る歴史を叙述し、その上、政治、文化、商業、宗教の各分野において日本が外国と接触した実例の考察がみられる。Japanese Fairy World は民俗学的に見て日本の国に伝わるつくりばなしに日本文化の継承を期待する。The Religions of Japan は仏教の根拠地の一つ、福井の生活で神道と仏教の形態や民間伝承について多くを学ぶ。

いわば時代と文学と宗教の三要素が一つになって三位一体を構成する。ここに表現の飛躍が見られるかもしれないが、この三つが人間の歴史に登場してくる。いまこれらの歴史を一本線上に置いてみると、１８７０年末のグリフィスの来日の期待は大きい。級友プラインが教えてくれた日本昔話にたいする文学的興味、息子を牧師にしたいという母の願い

に応える気持ちで日本上陸する。

居留地の米人宣教師と交わり、明治新政府の日本人を知り、翌年3月には福井藩の理化教師、7月に藩の廃止、明治政府の中央集権政治に変革。役人の海外視察、留学生、お雇い教師、英学者の活躍するグリフィスのいう転換期の（epochal）最も重大な（pregnant）時代を迎えた。いわゆる日本が近代国家を目指して欧米の制度を取りいれたりして憲法の制定など整ってきたのが１８９０年。世界の中で日本が伍していくために必要なものは国力の発展であった。国力を表すpowerとは軍事力のことであり、国威を発揚すべく世界の強国に追い付こうと国民の精神をナショナリズムの方向へと駆り立てる時代の到来である。

侵略か防衛か、いずれにしても戦争になる。日清と日露の戦争は日本の歴史上、未曾有の国の存亡にかかわる大事件であった。どちらの戦役も有利に終わり、国民に自負を与える結果になり、いよいよ世界の国々と対等の立場に立つと思った。しかし世界の英知は戦争に対し平和の尊さに訴える世論の覚醒が始まる。戦争と平和。平和の国際的要望は国際連盟という加盟国の一つ場所で平和の擁護と繁栄を願う国際組織ができて、日本もそれに加盟することが出来た。そこで新渡戸稲造（１８６２～１９３３）の目覚ましい活動を知る。

日本の国際連盟加入は１９２０年の設立と同時であったが、１９３３年に日本、ドイツが脱退した。平和主義を標榜するグリフィスにとって国連設立を記念にとりわけ弱小であるが誇りの高い数か国（オランダ、スイス、ベルギー、朝鮮など）に向けてfairy talesの本の出版に没頭する期間を持った。日本の孤立主義は米国とのそれまでの親和の関係に不和が生じ、排日感情がつのり始める。グリフィスの福井再訪の機会になった。

二　福井の仏教
―日本の仏教は徹底的に研究する価値が十分にある―ＭＥ

（一）A prolific writer。この英語の意味は多作の作家と言って、グリフィスをこの種の作家と評する人もあるが、簡単には決めつけ難い。福井で経験した最初の日本および日本人が彼に与えた多彩な事実に由来するかも知れない。大体、彼が日本に行くことになってやらねばならぬことは第一に化学教師の仕事であった。しかし第二は母アンナが息子グリフィスの生まれる前から牧師にしたい願いの詰まったもっと大きな荷物であった。本より本音、根っから生じたものではない。

教師は日本における体験をあとにして終り、牧師はスケネクタディ、ボストン、イサカの各地で延べ26年の職務を終えた。福井で教えるうちに日本が置かれている近代教育への脱皮の必要性を実感し、教育の仕事に深く関わりたい思いが深まるようなこともあった。しかし教師は元々かれの内心の働きにはない。思いがけなく大きな喜びがあった。その土地の醸し出す自然の美しさである。これは三つ目の教会のあるイサカの湖と丘の美しい風景にもあった。美しく崇高なものへの憧れがグリフィスの求めて止まない面であった。

人はその身近にある風土的なものに情愛を懐く。日下部太郎の日本の地に行くグリフィスに文学を教えた友がいた。また牧師は孝行息子であればしかたあるべし。それを辞退す

るという。そして著述に専念すると発表した様なものである。生理的にいってグリフィスは生まれつき、むしろ根っからの物書きと呼ばれていい。１９０３年９月17日、日本でいう彼が還暦を迎えることができた日、この日を契機にやらねばならない。二兎を追うもの一兎も得ずのたとえのごとく牧師か著者かのどちらか一つをとるほかはない。

聖職者としての26年の生活は幸福であった。それは『三つの牧師職の明るい思い出』という自伝的作品になった。（“Sunny Memories of Three Pastorates”1903）そのなかでグリフィスは牧師の仕事とその報酬について振り返った。そして富や権力や名声のために医者、弁護士、技師、銀行員、教授、政治家になろうとした人をうらやましく思ったことはないと述べている。お金がいらないことはない。それどころか彼の俸給から家族に生活費として送金しなければならなかった。そんな牧師がさらに望ましいことに、日常表面化してきてものを書くということが周りから広がって遠く旅へと移るようになり、それの記憶のための記録への要求が増え、面白くなると時間が足りなくなる。グリフィスの書き置きが急増する。やがて最後に残るのは生きて書き残すことのみの人生とは相成った。

日常の記録となるとjournalsがそれにふさわしい。なによりその日あったことを並べる。簡潔にかつ印象的なことを大事にする。客観性がある。忙しいなかで即興性に富む。スケッチ風である。グリフィスはこれを選んだ。このおかげでわれわれ福井人は今日、明治初期における郷土を認識するのに必要な感情移入が可能になる。姉マーガレットへの手紙はその記録の詳細な記述に他ならない。

（二）外国文明の影響を受けていた東京や横浜だけにいては到底望めない日本人の伝統的行事が福井のような地方の生活に垣間見られた。グリフィスにとってこれは願ってもない収穫だった。しかし実際に住んで見ると、味わう精神的な苦痛は大きく、キリスト教を信じるアメリカ人で寺院や偶像にかこまれた異教の土地での生活を経験したいと望む人があろうかと思われる。ところが福井の人の異人にたいする感情や態度はよかったので、自由な散歩や見学が楽しめて、彼が日本について書くものはすべて福井の見聞と経験から生まれているといって過言ではない。

「福井を仏教王国であると見抜くや、教える仕事をやりつつほぼ一年、私は神道と仏教の学問的、庶民的考察の機会を多く持った」とグリフィスは振り返る。“The Religions of Japan”は日清戦争の真只中の出版であった。大政奉還、王政復古を旗印に日本が世界に伍してゆける軍事力（a World Power）をもつために国民は生産力を高める精神を養うべしを合言葉に一丸となった。明治５年１月７日のグリフィス日記から。「中野、大岩、吐酔と大きな寺へ行った。通りは大勢の人で、店は大繁盛。寺は縁側までも人があふれて立錐の余地もなかった。多くの僧が読経をしていた。ろうそくの火、お祭り用の木、燈明があった。五百人が数珠を掛け両手を合わせ、ナムアミダをむなしく繰り返して祈っていた。みんなが振り向いて異人の私をみた。他の大きな寺にも歩いて行った。そこでは数百人が寺に付属した食堂で、ご飯、餅、大根を出してもらって食べて居た。飯と汁を作り、煙と汗でつか

れて腹をすかせた人が、炭火で餅を焼いたりして板の間で食べていた。金銭を数えたり、受け取ったりする人がいた。まことに賑やかな眺めであった。靴をぬいで私達は僧の部屋に入った。そこは僧が着替えをし、眠り、食事をする。忙しそうで、しばらく彼等と話してから、長い廊下を渡って、大きな仏壇へ行った。そこには金箔の柱、祭り用の木、ろうそくがあり、数千人の参拝者が座っていた。境内は人でいっぱいで、食物の屋台が出ていた。すべてが楽しくにぎやかでおもしろかった。夜と早朝にも勤行があった」。

これは親鸞の遠忌を偲ぶ祭りで七日続き、田舎から出てきた人でにぎわう。東西両院は説教を聞く人で満員。見聞したグリフィスはこれら様々の異文化を記述することのみに任せて、いちいち問い詰めたりはしない。写したに過ぎない。

写真を見るような描写がある。書物からでは半分も分からないのが日本の宗教であるという。１８７１年11月30日の日記。「この前の夕方、日暮れ前の散歩をしていて入口の障子が半ば開いている家を通った。そのなかで仏壇を前に、父と母と子供、母に抱かれて赤子が座っていた。蠟燭が燃えていた。小さい祭壇に香の煙が立ち上がっていた。みんなが両手を合わせて、頭を下げ、唇で真剣に祈願を呟く様子は、とても美しくて興味ある眺めであった。お祈りがすんで、父が小さい鈴を三度鳴らし、また頭を下げると、仏壇の下にある一冊の本を大事そうに取り出して、二、三分、声を出して読み、もう一度頭を下げてお参りは終わった」。

（三）グリフィスは明治４年３月、先生になって福井に来た。１８７１年というと今から１４０年以上も前のことで28歳。ところが驚いたことに彼の日本国は廃藩になって封建社会が近代社会に変わる革命が始まるところに飛び込んで来た。彼に驚きと歓びを与えたのは福井の四季の変化でした。６月の景色を初めて眼にした時の感動はその日の日記に短くかつもっともそれに合ったことばが印象深い。それから彼の気持ちをこの感動を姉妹にも分かち合おうと手紙で知らせる。（6月10日）

同僚の英語教師のルセー、通訳の岩淵、役人の一人とグリフィスが休日の散歩を馬で出かける。神武天皇の命日に当たって国中が休みである。

The country is one mass of tender living green, — transplanted rice is lovely — when so young. Most of the work — all in mud and under water, is done by girls &women. The mountains are masses of solemn and sunny green also, beautiful as fairy land, and worthy of castles and historic renown. Indeed, many of them are haunts of tradition and story.（和訳。田舎は穏やかで生気にみち、緑一色に包まれ、田植えの稲は若くて美しい。泥の中、水の中の仕事はほとんど女と子供がする。山は緑に固まってくすみ、妖精の国の美しさは城と歴史の名にふさわしい。実際、山の多くが伝承と物語の生息地である）。文中に文字通り妖精の国を表す fairy land を見出す。

グリフィスにとって妖精の国日本は福井にあった。福井の風景をなす山や田んぼの佇まいに故郷の母を見た。この美しい国をくまなく飾る、青々した緑のなかに整列した美しい

田をなんとかして母に見せたい。こういう望郷の念に駆られるとき眼前に髣髴するのは母のイメージであろう。そこには生物学的な理由の他に学習的理由が挙げられるであろう。すなわち母子の間を親密にする話の世界である。いわば人間が最も早くにぶつかる文学の世界である。しかもそれは日本にもあった。それが福井という山と田圃の景色、生徒たちとの遊びのなかにあるのを発見した。書くことが持って生まれた才能とすれば、これをグリフィスが黙っているわけがない。ヘボンの和英辞書で日本のおとぎ話を読む勉強が始まった。

それにしても帰国後、一年で『皇国』、4年後に『日本昔話』の出版と続く。この英文日本妖精の世界』(Japanese Fairy World)には35の話が入っている。うち6篇は福井から得た題材を使った彼の創作話である。"The Fire-Fly's Lovers"(蛍の求婚者)。"Little Silver's Dream"(お銀の見た猩々の夢)"Lord Cuttle-Fish's Concent"(イカ卿の音楽会)"Lord Long-Leg's Procession"(足長の大名行列)"The Gift of Gold Lacquer"(黄金の漆の贈物)"The Child of the Thunder"(雷の子)の6話である。それぞれが人間の生活に現れる美しい面、尊大さ、滑稽なところ、諧謔を要素にして書かれている。『怪談』で有名なハーン(小泉八雲　1850~1904)は日本に残る非現実的な話を詩的想像力で妖精に変えて、透明でエキゾチックな話にした。『怪談』はハーンのfairy talesであると思われるが、ユーモアやアイロニーに乏しいだけにグリフィスの妖精話がもっと日本で広く紹介されてよかったのではないかと惜しまれる。

三　日本妖精物語
―日本人の歴史的直感、豊かな文学的想像、着想の面白さ―ME

(一)ラトガース大理科1869年卒のクラスメートで早くからグリフィスの友人として登場するのはR. C. プラインである。気のあった学生の間柄であったばかりかグリフィスは友の家族からも優遇されていた。卒業の年に二人で始めた学校新聞タルグム(Targum)は今日まで大学新聞として見事に生き抜いてきた。名家の誉れの高いプライン家はニューヨーク州の首都オルバニー(Albany)にあった。グリフィスがこの地にプラインをたずねる時、ハドソン川を船で行った。日記には下りの船所要時間9時間かかった。

父ロバート・H・プラインは1833年ラトガース大卒業。改革派教会のメンバーのための高等教育を授けることで高い評判の学校であった。リンカーン大統領の任命によってタウンゼント・ハリスの後任に1861~65年まで駐日米国公使をつとめた人物であった。そうするのが神、教会、自国、そして日本への義務であるといって外国伝道主事のフェリス博士とともにグリフィスの日本行きをもっとも励ました一人であった。後日談になるが、グリフィスの日本行きには多額の借金が要り、同年8月の手紙で、フェリスとプライン合わせて925ドルの借金を返すことができたと喜んで姉に書く。

「タルグム」創刊のほかにもう一つ2人を結ぶ絆があった。グリフィスが"The Fire-Fly's Lovers and Other Fairy Tales of Old Japan"(1908 New York T. Y. Crowell & Company)に置いた

献辞にそれを見る。学生時代に日本のお伽の国に入る宝石の鏤められた扉を彼に開けて見せてくれた級友プラインに捧げてある。

To my classmate
ROBERT CLARENCE PRUYN
Who in student days opened
for me the jewelled gates of
JAPANESE FAIRY-LAND

さらに“Japanese Fairy Tales”の序で級友プラインが日本の心やお伽噺について話してくれた（１８６５）。最初の日本人学生、横井小楠の甥左平太・大平兄弟のラトガース大予備校入学（１８６６）。彼が日本の城下町で開拓教師になるなんて。福井と東京で庶民や貴族から仏教に深く起因する古い話を聞く。そして今日、かつて隠者の国の宝であったものがいかに移り変わりをしたか。このへんの原文を引用してみる。

In this year, out of the treasures of the once hermit nation, now become one of the households in the community of nations, please accept this offering of stories, new and old, and walk with me through the jeweled gates you first opened to your fellow-student.（大意。今年、宝の国が国際連盟に仲間入りしたのだから、新旧の物語の提供を受けに君の教えてくれた宝の門からいっしょに歩いて入ろう）。

（二）どの国にもある昔話からその国の民族性、文学性、言語形態をさぐる研究がある。物語が秘めている魅力もそこにあると思われる。グリフィスも福井の生活で日本人と交わるうちに昔話の世界が現存することに気づいた。私の訳したグリフィスの福井日記を読んでいて、これはあの西脇順三郎（１８９４～１９８２）の詩を読んでいる気になっていた。このモダニズムの詩人は現在を新鮮な感覚でとらえ、しかし伝統を踏まえて、詩を作ってきた。人生を旅に譬え、自然を友とし、異なるものに興味を感じ、それを透明なことばで直截に表現した詩人であると思うからである。日記からの引用。（7月20日）

Saw a woman praying to the moon, with bead &....Coming out, saw the heavens throbbin with the weight of glory and the river of heaven coursing in starry light & mirrored in the moat. Shooting stars Yobaiboshi-creeping stars.

（大意。一人の女が数珠を持って月に祈る。外に出ると、天界が栄光の重さで脈打っていた。天の川が星の光の中を勢いよく流れ、堀の水に映っていた）。

おそらく日本人の内面生活を知るのに、最初に日本の昔話を世界に伝えようとして日本語をおぼえることから始めて、30の話を英訳してまとめたのがＡ・Ｂ・ミットフォード（１８３７～１９１６）の Tales of Old Japan という本（１８７１）である。30のうち Fairy Tales はつぎの９話も含む。『舌きり雀』『文福茶釜』「かちかち山」「花さか爺」『さるかに合戦』『桃太郎』『狐の嫁入り』『坂田金時』『こぶとり爺さん』。このうち Japanese Fairy World に『』の話が５つある。

もっとも興味あることはここにグリフィス自身の福井昔話６篇の登場である。まずそこから「雷の子」The Child of the Thunder という一篇について考えてみたい。

（あらすじ。）白山の山里に貧しいがよく働く百姓の老夫婦が住む。養子が欲しくてももらえない。谷川を利用して三反の田を作った。

収穫の半分を租税に出す。夏の日のこと。雷雨があって目がくらみ、耳が聾する音がするや元気な男の子がいた。雷神の贈物と思って雷太郎と名付けて養子にした。親のいうことをよく聞く優しい子供になる。家計が楽になる。しかしよその子と違って大神楽が村にきても、一人空を眺め川で遊ぶ。誕生日がきて、18歳になった日、彼が嵐の中で雷から生まれた（口にしてはならない約束事）と聞かされると、両親に別れを告げて白竜になって飛び去る。竜は両親の目の前に大きく逞しくなって現われると銀の城の如き入道雲のなかに消えた。

竜の妖精は竜宮を住処とするが、この話の竜は雷神の住む空が住処である。この美談に後日談あり。裕福な夫婦が死んで村の火葬場で白骨になり遺灰と骨壷に入れて墓地に埋葬された。白竜を彫った墓は苔むし、小さな村の古い墓石の一つになる。グリフィスは実際に、福井で火葬の現場に立ち会い、観察したことを手紙で詳しく姉に知らせた。（4月9日）田が出来る過程の描写も適切である。伊勢の大神楽も見ていたに違いない。（7月21日）日記には火葬（cremation）について死体を焼く日本の葬式と書き、葬式の記録が多い。「墓所まで楽しい散歩。どの焼き場も使っていて、今日は葬式が四つもあった」。クリスチャン・インテリゲンサー紙への記事にも西洋の埋葬とくらべ「早くて清潔」な所が良いと書き送る。立ち上る煙に死体から離れて天に昇る精霊を想像していたのだろうか。守るべき約束事が破れて運命が逆転する話は世界の fairy tales の定番である。

（三）明治3年から7年まで足掛け5年の日本滞在の土産話がグリフィスの処女作であり代表作の The Mikado's Empire（皇国１８７６）となり、その4年後に出版の第二作が Japanese Fairy World（日本おとぎ話、ニューヨーク）になった。序で話の数は34と書かれているが、本文にあって、目次は XXXIV までになっていて、XXVI The Waterfall of Yoro, or the Fountain of Youth. が脱落していた。話の数は35である。これは7年後のロンドン版でも踏襲されている。いずれにしても当時この本は英国でおおいに読まれたという。

日本の英国公使館に勤務のA・B・ミットフォードは日本語の自由な習得から始まった。それからその国の文学や、歴史についての知識を高め、変革のうちに内面の記録をたどりつつ古い物語を読み、伝統的な一刷 Tales of Old Japan を上梓した。（１８７１）

グリフィスの日本語読みの勉強は福井にいてヘボンの『和英語林集成』を読むことから始まり、続行し、東京で特に高橋是清や中村正直に習ったのでおとぎ話の日本語は読めただろう。しかも話を取材した。最初に出会った日本人留学生から聞いた日本の民話や炉辺話、日本人の驚くほど豊かな発明心、美術に見るいろんな空想、話になる前からあるオリジナルなものなどを通して彼の集めた昔話は町の巷に端を発していた。それに比べてミットフォードの昔話は書斎のそれであった。おまけにグリフィス自身の習作6編が混じっている。

The Tongue-cut Sparrow「舌きり雀」ミットフォード版。「昔々、心の優しい爺さんの飼っていたスズメが意地の悪い婆さんに洗濯糊をなめて舌を切られて放り出されてしまった。

むごい話にひどく悲しんだ爺さんはスズメを探して再会を喜びスズメの宿で御馳走になった。土産のつづらは軽いがいっぱいの宝。欲張り婆さんの重いつづらは小鬼や化け物がいて婆さんを苦しめた。養子を取って家は栄えた。めでたし」。グリフィス版も話は同じだが、より論理的、より面白く読ませるために創意工夫されてある。話の始めに婆さんの意地の悪さを説明して終わりに婆さんは死んで、養子をとり、幸せな爺さんになる。この話は善悪の違いの教訓的譬えであるが、グリフィスは「雀の宿」を超自然な妖精の世界に変えて、実は、日本人の家と家族の奥ゆかしい暮らしぶりを知らせる意図があると考える。

（四）グリフィスは若い時から、詩作、読書を好んだ。福井にいた時、宿泊の旅にディケンズの『骨董屋』を読み、福井日記を見てもシェイクスピア、英国詩人テニソンを諳んじていた。理科の学生であったが、作文、随筆、演説が巧みでよく受賞している。日本文学にも関心を持ったに違いない。級友プラインが話していた内容、形式ともに伝統的で面白く、手軽に手に入る a Japanese book of fairy tales を書く気も何処か心の底にあったかも知れない。グリフィスは母方の先祖がスイスからの移住者であって、幼いときに大叔母のハンナとサラからスイスの昔話をきいた覚えがあった。

白山登山の偉大な体験の夏が終わり、遅れがちだがようやく待望の個人住宅と実験のための化学所の完成が見えてきた9月20日の日記のたった一行の記事が読む者のこころを動かした。英文 'Boy's book on Japan took definite shape.'（男の子の読む日本に関する本の構想がまとまった）。これを見て彼のなかに衝撃が走った。級友がグリフィスに日本で価値ある探し物に古くて新しい文学のあることを。すでに姉への手紙に A. B. Mitford の "Tales of Old Japan" を送れと頼んでいた。（7月15日）この書は日本のおとぎ話を忠実に英語にしたものでグリフィス来日の１８７１年発行の最初の翻訳本であった。しかし上京して大学南校教頭のフルベッキの本で読んだので、先の注文を取り消したという。

もう一つ。これが文学であるために不可欠なこと、それは物語には美しい自然が背景にないといけない。有難いことに彼は福井でそれを感じているのだ。

田舎はおだやかで生気に満ち、緑一色に包まれる。田植えして若く伸びた稲が美しい。この泥のなか、水の中の仕事はおとなも子どもも女がする。山は明るい緑のかたまりにくすんでいる。妖精の国のように美しく（beautiful as fairy land）、城と歴史的名声に相応しい。実際、山の多くが伝承と物語の生息地である。雨季に入って2週間、雨はほとんど休みなく降っている。田植えはすっかり終り田園は新緑だ。

福井に来て何より慰めになったものは彼が Hakusan と呼ぶ山の眺めである。頂上を極めて下山の折によく見ると日本を海のスイス（the Ocean Switzerland）と呼んでも少しも誇張にならないと思った。（白山登山を記事にしてオランダ改革派教会刊行の The Christian Intelligencer に送る）。

（五）真の意味に於ける通訳の例をグリフィスの福井の教え子、今立吐酔（１８５５～１９３１）に見たい。グリフィスが昭和2年

の福井市再訪のとき通訳を買って出た人である。１９２７年４月、56年ぶりにグリフィス先生の福井訪問があるとの知らせを受けて、福井市役所と福井中学では記念になるパンフレットを用意した。どちらも「グリフィス博士」の生涯の榮光をたたえて見えた。ただし前者に文責の名前はなく後者は緒言になって学校長大島英助は博士を母校の大恩人と称えていた。両者ともグリフィスが書いて彼を有名にした『皇国』The Mikado's Empire を挙げていた。

ところがあることに気が付くこととなった。福井市役所の「グリフィス博士」は博士の生涯のほとんどを簡潔にかつ正確に書いている。わたくしごとになって恐縮だが、私はようやくグリフィスの一生を著書中心に辿って来たが、昭和２年において誰かあのような記述に及ぶだろうか。一体、誰の筆になるものだろうか。少なくとも博士と同時代を生きた人にかぎってなされるものではないか。

そこで市役所のＭＥ１と中学のＭＥ２の比較を試みよう。ＭＥ２では訳者の福中教師斎藤静のいう「グリフィス博士の見たる維新時代の福井」の章に最大の関心が置かれていて、福井の日常が日記体で記されていて臨場感にうたれる。ＭＥ１には福井の学校、生徒についての記述をとりあげ、なかんずく「其の文流麗にして風韻に富み能く我が実情を写照し日本の存する限り、この書は亡びざるべし」の賛辞を聞く。このところ後述するが、実際、グリフィスが福井に残した日記とは違っていた事実があった。他方、斎藤の「訳者の感想」という良心的ページがあって、いくつもの印象を残しているが、「福井の人情風物に接していかなる感想を抱かれたか」など好奇な眼で捉える人でもあった。面白いことに斎藤はＭＥをして名著と称し、かつ鮮明な描写をして絵画的記事になっていると述べる。

さらに市役所の文章で問題にしたいことの一つはラトガース大学に留学の俊才日下部太郎を教えていて福井藩から見込まれ福井に教師に雇われることになる―というと起承転結に密着性があるが、市役所の考えはあくまで「会会（たまたま）」の偶然性のしからしむるところであろう。もう一つは次の文を読んで見る。

博士は自然人生諸般の題目に就いて解説したるにても知らるゝ如く、１個の理学者に止まらず、文学を味ひ美術を解し、識見高くして趣味深き好紳士なりき。

グリフィスがいわゆる文学（小説にかぎらず literacy）特に fairy tales のような imaginative story を書くということを誰が信じようか？書くということ。それがグリフィスにあった。分野別にすると、歴史（古代　現代を物語り風に）、創作物語、伝記もの、寓話的読み物、説教、聖書研究、教科書、通信（新聞　事典）、日常的日記や手紙などに亘っている。

四　今立吐酔
―思想ヲ動シテ我身ヲ望ム人アラハ我友ニ非ス―吐酔

私が今立吐酔という名の人物について最初に発表したのは１９７４年の日本英学史学会が大阪で開催されたときであった。吐酔の義兄にあたる今立成因氏にお目にかかって吐酔についてお話を聞くやその人物への心からなる尊敬の気持ちが伝わってきた。私にはすでに吐酔さんと同じく成因氏も大事な人になって、今日に及んでいる。

寒い風が吹く春先、炬燵に成因氏と向き合って入り、氏の吐酔談義を聞いていた。小柄で老いた体躯に薄着をしておられたが、頭は毛糸で編んだ袋の形の帽子を耳までかぶり、両肩から首にかけて包み込むようにして毛糸で編んだ大きなショールが軽くかかって見えた。これらを一つ一つ見終わってようやく目の前の人にもう一度目が行ったとき、老人の姿は曇り日の冬の雪景色の色になって目に映った。小声でゆっくり言葉少なに語られた。

成因氏が見せてくださったものの中に「昭和三十七年五月、吐酔大人のこと、成因氏」と書かれたノートがあった。因みに成因氏は当時74歳であった。このノートを借りて書いたのが「若越郷土研究」の「今立吐酔とグリフィス」であった。なぜ、生徒のうちで吐酔だけをかわいがったか。寺の子で五男三女の中の第五男に生まれる。福井藩校明新館に選ばれて入学した時は満15歳で、グリフィスとは一回り歳の差があった。日記からフランス語の生徒15名を選ぶ。エリートクラス。吐酔もその一人。フランス語の生徒二人と散歩したうちの一人がそうかも。（6／27）フランス語の生徒がきた。（7／2）フランス語の生徒を僧侶の吐酔に任せた。（9／7）吐酔が夕食に来た。（10／7）吐酔が僧の職をやめて、私の家に来ることになった。（10／13）」これだけでは吐酔はだんだん近づく獲物のようにも気のどくに見える。マギー姉への手紙（10／28）に吐酔が初めて知らされる。

吐酔は驚くほど頭がいい。わずか15歳。少女のようにおとなしくダイヤのように輝く美しい少年だ。仏語、英語、化学を学んでいて、ぼくが前に教えた仏語の組の少年を教える。僧職にあったが辞めるように懇願していたところ、長い間、否定の返事をしていたが、ついに金刺繍の襟を外し、長いクレープの法衣を畳んで僧職を断念した。

将来は牧師を職業にし、異教徒を改宗させる仕事に対する思いやりか。形式へのこだわりか。また少年の考えが妥協か利得かも判断が難しい。美少年の魅力か。予想される大著の執筆に必要な生き字引か。その答は次の晩年にまで持ち越されることになる。

なぜ、五十数年ぶりに福井を訪れた外国人の通訳になって現われたのか。一体、どんな思いがそこにあったのか。実際、吐酔はグリフィスの一生を見たといってよい。１９２６年、福井市役所発行の「グリフィス博士」がそうだ。成因氏は二人の動きから目を離さなかった。グリフィス氏は吐酔を呼ぶに昔のそのままにトスイ、トスイと吾が子を呼ぶようになつかしそうに呼んでいたという。我々が求めるのはキリスト教徒と仏教徒のこのような友情の例であろう。西洋の科学精神と自由思想を自国のために役立たせたい。福井の理化青年の研究費のために博士が執筆中の“Japan's Great Emperor, Mutsuhito and His Reign 1868～1912”の翻訳権の許可を得たが絶筆に終わった。再会のキリスト教徒と仏教徒の二人は永遠の友情と日本への理解と愛情で心がふるえていただろう。

お雇い教師で福井に招聘されたグリフィスであるが、福井の自然、宗教、人情を深く知れば知るほどに日本といえば福井に象徴されるような強い印象を持った。処女作であり代表作になったThe Mikado's Empire『皇国』は福井の経験に基づいて発想し書かれた傑作と

言える。そのことは生来の文筆家である彼の福井時代の日記（journals）手紙、通信、メモによってもあきらかである。彼は明治の始めから昭和の始めまで世界の中で日本が近代国家として急速に成長する過程を見て、聞き、話し、かつ書いた。しかし日本が国際連盟を１９３３年脱退して孤立状態になりつつあるとき、日本各地で講演し、特に日本の学生に平和の意味を訴えた。三冊目の日本お伽噺はそのころの作品であった。彼は立ち寄ったのでなく訪ねてきた。白山、晴れた日は福井のどこからも青く、白く輝いて見える山、にあいさつをしたく思った。通訳として片時も離れず日本語を知らないグリフィスの役に立った銘刀のごとき切れ味もするどい岩淵竜太郎がいた。そして今、『仏教問答』の日本語訳、『歎異鈔』の英語訳の著書のあるトスイが通訳を買って出ている。ここにきて結論をだそう。ミニ伝「グリフィス博士」の作者はかのダイヤの如き美少年トスイ、今立吐酔、吐酔大人であると。